

# 塚原表現学 その継承と展開

西田 隆政

## 1. はじめに

浩瀚なる塚原表現学の全貌を、限られた紙幅で紹介することは不可能である。そこで、本稿では、論文「現代文章表現法批判」(1975)を出発点として、塚原表現学を見直し、これからの表現学研究にいかに関わっていくのか、という点を中心に情報提供することにした。

「現代文章表現法批判」は、その刊行後に、3冊の著書に収録されている。この点からも、本論文が塚原表現学において、重要な意義を持つことが理解される。

ただ、塚原表現学は、関連分野の「学会」において、正当に評価されていないのが現状である。その点も踏まえて、今後、いかにその学成果を広めていくかという点についても、述べていくことにしたい。

## 2. 塚原表現学の主要文献

ここでは、塚原表現学の主要文献を提示する。塚原表現学の著作目録としては、『国語表現の史的形成』収載の「国語表現関係著者著作目録」がある。そこでの「著書」と提示された文献を(1)に掲出する。さらに、それ以降に刊行された著書を(2)に掲出する<sup>1)</sup>。

(1)  
『竹取物語索引』1953 三色堇の会

『新修 竹取物語別記』1953 白揚社  
『徒然草新抄別記』(共著) 1954 中央図書出版社  
『国語副詞の史的研究(1)』(共著・『大阪市立大学国語学研究調査冊子』) 1954  
『国語副詞の史的研究(2)』(共著・『大阪市立大学国語学研究調査冊子』) 1955  
『国語副詞の史的研究(3)』(共著・『大阪市立大学国語学研究調査冊子』) 1955  
『更級日記総索引』(共著) 1956 武蔵野書院  
『和泉式部日記総索引』(共著) 1959 武蔵野書院  
『堤中納言物語』1960 武蔵野書院  
『言語と文学 竹取物語』(共著) 1961 洛文社  
『国語史原論—日本国語の史的展開—』(1961) 塙書房  
『大和物語語彙索引』(共著) 1970 笠間書院  
『王朝の文学と方法』1971 風間書房  
『狭衣物語語彙索引』(共著) 1975 笠間書院  
『堤中納言物語上』(共著) 1976 新典社  
『堤中納言物語下』(共著) 1977 新典社  
『思考と表現』1979 共文社  
『堤中納言物語』(新潮日本古典集成) 1983 新潮社  
『王朝初期の散文構成』1987 笠間書院  
『伊勢物語の章段構成』1988 新典社

『国語副詞の史的研究』(共著) 1991 新典社

(2)

『華甲夢幻—国語・国文・教育・雑感—』  
1984 静江堂

『国語表現の史的形成』1993 新典社

『致事前宵—国語・国文・雑感・漫吟—』  
1993 春光園

『国語構文の成分機構』2002 新典社

『枕草子研究』2005 新典社

『新修竹取物語別記補訂』2009 新典社

(1)と(2)には、研究書だけでなく、古典作品の注釈・影印・索引もあり、塚原表現学の研究対象の広範であることが伺える。(2)の『華甲夢幻—国語・国文・教育・雑感—』は、(1)には未収録であるが、表現学関連の論文が多数収録されており、ここに掲出した。

なお、これらは、あくまでも著書としてまとめられたもののみである。当然のことながら、表現学に関連する研究論文等の数は、数百を数える。著書に未収録の論文も数多くある。注1の「目録」が「抄」とあるように、全貌の把握は、不可能である。

次章では、塚原表現学の学的なあり方を知るための一助として、「現代文章表現法批判」を見ていくことにする。本論文は、本学会の機関誌『表現研究』に掲載されているだけでなく、塚原表現学の総括とも位置づけられる論文だからである<sup>2)</sup>。

### 3. 「現代文章表現法批判」の位置づけ

「現代文章表現法批判」は、1975年9月刊行の『表現研究』第22号に掲載された。この号では、1975年5月25日に防衛大

学校で開催された表現学会第12回大会のシンポジウム「現代文章表現法批判」を踏まえて、「特集・文章表現法」としている。同誌に掲載されたシンポジウム報告、押見(1975)では、「後の質疑討論では、会員より極めてショッキングな考察であったといわれ、前段の5項までは現代の病根ともいうべきものを文明史的に観察したものであるとの発言があった」(p.26)とある。

そして、その後、この論文は、『思考と表現』(1979)『国語表現の史的形成』(1993)『枕草子研究』(2005)の三冊の著書に収録されている。

『思考と表現』においては、6章構成の5番目の章「現代と表現」として収録される。6番目の章が「作文と表現—後記に代えて—」であることから、結びの章に相当すると考えられる。ただし、収録の際には、「序」の部分は削除されている。

『国語表現の史的形成』においては、冒頭の章に「国語生活の史的背景」として収録される。次章以降、個々の作品や言語事象の表現を解明する論文が収録されていることからすると、序章に該当すると想定される。本書は、塚原鉄雄著であるものの、参賀有志編でもある。安田(1993)の「あとがき」に「古稀記念という里程標を師弟相協力して樹てた」(p.526)とあるように、著者の意志が反映されたものと見ることができる。ただし、収録の際には、「序」の部分が最初の章「異質の混在」の冒頭部となるように構成が変更されている。

『枕草子研究』においては、最終章として、「参考」と別立てされて、「現代文章表現法批判」と論題そのままに収録される。

「序」の部分も原論文のままの体裁となっている。本書は、塚原鉄雄先生門弟有志により新典社より刊行されている。その「あとがき」によれば、収録論文「清少納言の言語観」の「後記」に「彼此対照」すべきことの指摘があり (p.376)、「参考」として入れた (p.410) とのことである。

以上の点からすると、「現代文章表現法批判」は著者の明確な意志により3つの著作に収録されていることになる。そして、その著作での章立てからすると、本論文は、塚原表現学において、序論とも、結論とも、あるいは、個別作品の検討においても常時参照すべきものとも、位置づけられるのである。

#### 4. 「現代文章表現法批判」の意義

まず、論文の構成を (3) に提示する。なお、本論文では、「序」の部分には章題はない。キー・ワーズは14項目あるが、それぞれの著書に収録される際には、削除されている。

##### (3) キー・ワーズ、(序)

|       |       |       |
|-------|-------|-------|
| 異質の混在 | 個人の分裂 | 複写の時代 |
| 照明の不在 | 言語の支配 |       |
| 表現の不備 | 構成の欠陥 | 論理と理窟 |
| 説得の表現 | 表現の規制 |       |

本論文の前半部分、「異質の混在」から「言語の支配」までの5章では、古代や中世など、国語史における各時代の異質の「集団」が相互にいかに関係しあったのかを踏まえて、各時代における言語表現の有様が論じられている。「現代」を「批判」するためには、国語史の古代から現代にいたるまでの変遷を把握することが

不可欠とする立場からである。なお、ここでの「集団」とは、「貴族集団」「庶民集団」(p.1) のような社会階層を指す。

そして、歴史を踏まえたうえで、「現代の社会は、異質集団が、関連して混在する傾向にある」とする (p.1)。それゆえ、現代の人間は「それぞれの集団に関与しながら、集団相互の乖離や矛盾のために、個人は異質的断片の集合でしかない」(p.3)。個人は「本質的な帰属集団を喪失」(p.4) し、「異質集団の異質性の集合体」(p.4) となる。しかし、「統合体であることは困難」(p.4) である。その結果、「現代の人間は、間接体験の集合体として形成される。そしてその間接体験は、直接体験の中に摂取されようにも、摂取すべき直接体験それ自体が、基本的に成立しがたい」(p.4)。

このように、「直接体験に基礎づけられる虚実真否の証明を封殺された現代の人間は」(p.5)「言語表現によって、実在の事柄を形成」(p.5) するしかない。それゆえ、「言語表現が事実を支配する時代」(p.5) となる。そして、その「言語表現に懐疑する」(p.5) 個人がいても、「言語表現を否定したり克服したりする決定的な立場と方法とを、基本的にあるいは一般的に具有しえない」(p.5) とする。

後半部分、「表現の不備」から「表現の規制」の5章では、前半の議論を承けて、現代の言語表現についての検討がすすめられる。現代の表現が「古代中世の遺物で成立される傾向にある」(p.5) ことを指摘したうえで、現代の文章は「骨骼構成が、全般的に弛緩する傾向」(p.6) にあり、「文章表現が構成されるものであるという基本原理」(p.7) が忘れられてしまっ

た、とする。

そして、「現代の表現は、文章論理と、理窟とを混同する傾向」(p.7)があり、「現代における接続詞の発達、——語彙の発達と用度の増大と——は、文章の展開が、理窟っぽくなったに過ぎない」(p.8)ことを示している。この文章論理の喪失の結果、「現代の文章は、構成論理を、飛躍して説得する傾向」(p.8)となり、4項の事例により、「現代の文章表現は、説得重視の傾斜が著大である」(p.9)ことが指摘される。

その一方で、「現代の表現は、定着以前に、規制が適用される傾向にある」(p.9)とされる。実態としては、敗戦以前の官憲による検閲のような規制ではなく、「現代は、集団圧力の改言が各種分野で盛行する」(p.10)。「規制された表現は、退化し、貧弱となる。それが現代文章表現の趨勢である」(p.10)とまとめられている。

上記の論考は、『国語史原論』(1961)にまとめられた、塚原国語史観と規定しうる、国語史の理論的な捉え方を基礎とした立論である。同書においては、各時代の社会階層を構成する言語集団が互いに相互に関係しあうかを基軸として、国語史の時代区分を試みている。それは、一般に行われる、政治史をそのまま国語史に当てはめていく考え方とは根本的に異なるものである。

とすると、塚原国語史観を踏まえて、各時代の言語表現を検討していくことが、塚原表現学の基礎ということになる。そして、このことは、現代の言語表現を考えるにあたっても、不可欠なことなのである。

なお、本論文は、一般的な研究論文と

はその構成を異にする。それは、仮説を設定してそれに対する結論を明確に定位するのではなく、現代の言語表現を理解していくうえで留意すべき点を時代の問題を踏まえて提示するものである。

本論文の意義は、歴史的研究であろうと、現代語の研究であろうと、国語史上の言語の変遷への視野、さらに、当該の時代や社会での各「言語集団」の言語主体の「在り方」とそれぞれの言語表現への反映についての洞察が不可欠であることを指摘している点である。塚原表現学は、端的に言えば、上記のような研究の方法を徹底する研究なのである。

表現学の研究において、上記の指摘は、ある意味で常識ともいえるものである。しかし、その厳格な実践と広範な展開は、たやすいことではない<sup>3)</sup>。それを再考、熟考させるのも、本論文の意義とすることができよう。

## 5. 塚原表現学の展開

塚原表現学は「無自覚」のうちに展開し活用されている。その一例として、神尾・小松(2002a)から(4)に引用する。

(4) 神尾は、ハワイ大学大学院(修士課程)で、日本語教育最前線の理論を学んだ卒業生から、留学の成果として、日本語教育にかかわる理論の概要の説明を受けたことがある。それによると、使用する用語は相違しても、発想は、先生のおっしゃる解釈文法と、まったく一致している。この話に深い感動を覚える。先生の文法研究の普遍と不朽に対する感動である。(神尾・小松2002a:3)

日本語教育で使用される文法学説は、「寺村仁田文法」とも称されるもので、現代日本語の記述的研究を目指すものである。この文法研究は、現代日本語についての「解釈文法」であり、「表現文法」であるとも見ることができる<sup>4)</sup>。遠藤・塚原(1975)での「文法というものは、どのようにして書いたかを追及するものではなく、どのように書いているかをきわめるものである」(p.12)に通じるようにも理解される<sup>5)</sup>。この考え方を、現代語において、追及したものということもできようか。しかし、小松(1997)は、(5)のように指摘する。

(5) 先にも述べたように、現在行われている新文法の研究は、日本語研究を飛躍的に進歩させた研究であると、その意義を評価している。ただし、それは文法としてではなく、表現学・表現論としてである。日本語の表現をこれほど緻密に、かつ具体的に分析し、考察した文レベル表現的研究の潮流は今日までなかったのではないかと思う。

(小松1997:8)

小松(1997)は、現代日本語の記述的研究を「新文法」として、その問題点を指摘する。そして、その一方で「新文法」が文レベルの表現の研究で多大な成果を挙げているとする。しかし、それは、あくまでも表現学・表現論であり、文法論ではないとする。

それを考える手立てとして、塚原表現学を支えるもう一方の対となる、塚原文法論の特質を確認することが重要となる。(6)は、塚原(2002)の解説で塚原文

法論の特質を整理した部分の引用である。

(6)

- 一、従来の学説を論理的、実証的に検証した学説である。
- 二、言語観に裏打ちされた体系を持つ学説である。
- 三、現実の用例に基づくことを貫徹した学説である。
- 四、文法論と表現論との間に厳密な境界を設けた学説である。
- 五、抽象的、観念的な文法論を超えて、表現の構造を解明する学説である。

(神尾・小松2002b:302)

現代語の記述的研究は、厳密に見れば(6)の項目のいずれもが該当しない<sup>6)</sup>。とりわけ、四が問題である。小松(1997)では「モダリティ」「とりたて詞」を例にして検討しているが、表現学の自覚のないのがその根本であろう。塚原表現学をはじめとする、表現学とその成果が理解されていない、あるいは、その射程外にあるということにもなる。

## 6. 塚原表現学の継承

塚原表現学の継承は、現実的には非常に困難な状況であると考えられる。なぜなら、継承しようにも、関連分野の「学会」において、その成果が受容され活用されていない、否それ以前に、正確に理解すらされていない可能性も指摘される。

(7)ただし、その山系の主峰は、中央の山脈に相当する国語学会に自然な形で包摂されていない。もとより、大切な

のは学会ではなく学界であり、そのなかで研究成果がどのように受け入れられているかであるが、この著者の場合、受容以前の問題として、その主張が、はたして、どこまで正当に理解されているのか、いささか疑問がある。(小松 1994 : 199) (8) もちろん、先生の学説は、多くの論文に引用されている。その卓見を無視できないからであって、先生の方法論や学的世界が世に認められたことを意味しない。(神尾・小松 2002b : 302)

正当な評価もなされず批判もされない、「無視」ともいえるのが現況であろう。それに対しては、地道なところから出発するしかない。それゆえ、(2) に掲出した著書の数々が非常に貴重な成果ということになる。

まずは、発信することが学識継承の第一歩となる。その点からすると、塚原表現学についての現時点での研究段階は第一世代の学問ともいえよう。まさに、資料整備の段階である。それが個別のテーマごとにより深く検証されて、第二世代の学問となり、さらにその成果が統合されて第三世代の学問となる<sup>7)</sup>。

以前、故小松光三氏の最初の著書『国語助動詞意味論』が上程されたおり、塚原研究室にて、「松下文法のように、心ある人に理解される本になるだろう」という、お話を伺ったことがある。優れた著作であれば、かならず、注目する人がいる、それを継承し展開させる人もいるということであろう<sup>8)</sup>。

## 7. おわりに

塚原表現学には、その対となる塚原文法論がある。そして、両者にはその裏付けとなる塚原国語史観が存在する。その全てを踏まえなければ、塚原表現学を理解することはおぼつかない。研究の学的世界を理解する際に、第一歩としてその方法を支える理論的な背景を理解するのは、当然の前提といえるものである。

とすると、塚原表現学を、継承し、さらに学的に展開するためには、表現学、ひいては言語の研究を学ぶ者に、これらの前提条件の整理と、そこから具体的に表現学の各研究テーマがいかに結びつくのかを、伝える必要がある。学的な成果を伝えるだけでは不十分で、その理解のためにも、塚原表現学の方法とその理解への筋道を示すべきである。

まずは、ここから「継承」と「展開」がなされるのではなからうか。そして、それは、塚原表現学だけでなく、表現学全般の課題ともいえるのである。

### 【注】

- 1)『落窪物語 賀茂別雷神社三手文庫蔵本』には「塚原鉄雄教授著述目録 抄」として全分野の著述目録、『国語構文の成分機構』には「塚原鉄雄先生文法関係論文・参考資料(抄)」として文法関係の著作の目録が、それぞれ収録されている。
- 2) 本論文と対となるのが 1978 年に『国語学』(112) 誌掲載された「平安国語の学的研究—方法の回顧と展望—」(『国語表現の史的形成』に「付録4 国語研究の学的展開」として収録)である。前



者は表現学研究、後者は国語史研究、それぞれについての、著者によるその分野の研究と学会の現況に対する総括となっている。

- 3) 塚原(1978)は「学的方法の実践があって、学的方法の理論がない」(p.499: 引用は塚原1993より)と、理論なき研究の限界が指摘されている。
- 4) 現代日本語文法研究会編(2003～2010)の7冊に成果がまとめられている。
- 5) 「どのようにして書いた(文を構成した)か」を追及する立場の文法研究もある。山田(1908)以来の文法研究の流れがそれに該当する。
- 6) 当然のことながら「該当しない」ことが現代語の記述的研究の学的成果を否定するものではない。小松(1997)と同様、稿者もその学的成果を高く評価するものである。ただし、今後記述的研究がより発展するためには、「暗黙の了解」(小松1997: 7)とするのではなく、その学的な立場を明確にする必要があるのではないかと考える。
- 7) 竹内・上山(1977)を参照。塚原(1978)には国語史研究の状況に即した解説がある。
- 8) 藤井貞和(2012)17章には小松(1980)が引用され、その意義が検討されている。

#### 【参考文献】

塚原鉄雄 1961『国語史原論—日本国語の史的展開—』塙書房  
塚原鉄雄 1971『王朝の文学と方法』風間書房  
塚原鉄雄 1975「現代文章表現法批判」

『表現研究』22(塚原1979・1993・2005収録)

塚原鉄雄 1978「平安国語の学的研究—方法の回顧と展望」『国語学』112(塚原1993収録)

塚原鉄雄 1979『思考と表現』共文社

塚原鉄雄 1987『王朝初期の散文構成』笠間書院

塚原鉄雄 1988『伊勢物語の章段構成』新典社

塚原鉄雄・算賀有志編 1993『国語表現の史的形成』新典社

塚原鉄雄 2002『国語構文の成分機構』新典社

塚原鉄雄 2005『枕草子研究』新典社

塚原鉄雄 2009『新修竹取物語別記補訂』新典社

糸井通浩 1988「書評 神尾暢子著『王朝国語の表現映像』『王朝語彙の表現機構』」物語研究会編『物語研究』2 新時代社

糸井通浩・半沢幹一編 2009『日本語表現学を学ぶ人のために』世界思想社

遠藤嘉基・塚原鉄雄 1975『古典文法要覧』中央図書出版社

押見虎三二 1975「現代文章表現法批判シンポジュームの報告」『表現研究』22

神尾暢子・小松光三 2002a「不易と可易—刊行にあたって」(塚原2002収録)

神尾暢子・小松光三 2002b「解説」(塚原2002収録)

小松光三 1980『国語助動詞意味論』笠間書院

小松光三 1997「文法研究から見た表現学の現在」『表現研究』66

小松英雄 1994「＜書評＞塚原鉄雄・算賀有志編『国語表現の史的形成』」『人文

論叢』53 二松学舎大学人文学会  
 竹内均・上山春平1977『第三世代の学問  
 —「地球学」の提唱』 中央公論社  
 塚原教授華甲記念刊行会編1984『落窪物  
 語 賀茂別雷神社三手文庫蔵本』 新  
 典社  
 築島裕1962「(書評) 塚原鉄雄「国語史原  
 論」」『国語学』50 国語学会  
 寺村秀夫1982・1984・1991『日本語の  
 シンタクスと意味』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ くろ  
 しお出版  
 仁田義雄2009a・2009b・2010a・2010b  
 『仁田義雄日本語文法著作選』Ⅰ・Ⅱ・  
 Ⅲ・Ⅳ ひつじ書房  
 日本語記述文法研究会(代表仁田義雄)  
 編2003～2010『現代日本語文法』Ⅰ～  
 Ⅶ くろしお出版  
 半沢幹一2009「付章 日本語表現の研  
 究」(糸井・半沢2009収録)  
 藤井貞和2012『文法的詩学』(笠間書院)  
 保科恵(文責)・長沼英二・岡田博子・安  
 田薫・小池博明・張平2009「後記」(塚  
 原2009収録)  
 森山卓郎1988『日本語動詞述語文の研  
 究』 明治書院  
 安田章1993「あとがき」(塚原1993収録)  
 山田孝雄1908『日本文法論』 宝文館  
 (甲南女子大学)

#### ◇表現研究関係文献紹介

定延利之の編著『私たちの日本語』(朝倉書  
 店、平成24年2月刊、¥2300円+)

本書は「日本語の構造や意味、用法に  
 ついて基礎的な知識や考え方を学ぶた  
 めのテキスト」(まえがき)である。一見、  
 真っ当な日本語学の教科書らしい。

しくわし、「直訳日本語ロックにみる  
 日本語の特徴」(第2課)「「チョー恥ずか  
 しかったヨ!」なカタカナの不思議」(第  
 5課)「「レポート提出しました＼(^o^)  
 ／」のすれ違い」(第9課)「キャラクタの  
 悩みあれこれ」(第13課)などなどのタイ  
 トルを見ると、あんまりポップすぎて、  
 テキストとして何年、通用するのかしら  
 んと心配になるぐらいである。

だから、本誌に紹介したというわけでは  
 ない。本書には一言も書かれていない  
 ものの、このテキストは実は、現代日本  
 語のさまざまな面における「表現価値」  
 を問題にしているのである。表現価値は  
 本学会の研究の胆というべきものであ  
 り、本書にはそれがきわめてリアルかつ  
 クリアに例示されている。たとえば、誤  
 変換や「言いまつがい」も、単なる誤り  
 としてではなく、コミュニケーションにお  
 ける、それ自体が表現価値を持つものと  
 して説明されている。

と堅いことを言わず、読み物としてだ  
 けでも十分に面白い。編著者の「無数の  
 ミクロレベルの不幸が繰り返され、血が  
 流され、屍が積み重なり、その屍を乗り  
 越えて」(第14課)云々という表現が、ま  
 さかろ抜きことばについてであるとは、  
 誰も思わないだろう。案外ギャグではな  
 く、ご当人はいたってシリアスなキャラ  
 かもしれないけれど。(半沢幹一)